

◆ 鎌倉市民同窓会主催 推進協議会共催 緊急フォーラム報告 ◆

「鎌倉の世界遺産を大災害からいかに守るか」

平成24年6月16日、高德院客殿で、鎌倉の世界遺産を始めとする文化財を、大震災や津波などの災害からどのように守るかについて、緊急フォーラムが開かれました。

冒頭に中島章夫市民同窓会代表と、推進協議会会長の松尾崇市長から挨拶がありました。

続いて柴山知也早大教授と木下直之東大教授の基調講演があり、その後、お二人に佐藤孝夫慶応大学教授・高德院住職と、鎌倉まちづくりコンサルタントの福澤健次さんが加わって、パネルトークが開かれました。

その間に、鎌倉市作成の防災資料の説明と、「武家の古都・鎌倉」の構成資産のビデオ上映も行われました。以下、講演とパネルトークの発言要旨です。



パネルトークで語る
(左から)木下さん、佐藤さん、福澤さん、柴山さん

基調講演 「鎌倉を襲う津波の予測と減災方法」

柴山知也早稲田大学理工学術院教授

沿岸防災の研究をしているが、災害は住む場所で異なる。地域ごとに減災シナリオを考える。鎌倉にどのくらいの津波が来るかは、数値モデルから計算が可能である。最近では世界的に津波・高潮災害が頻発しているが、バングラデシュでは日本などがサイクロンシェルターを提供、被害を少なくした。

東北の地震津波に関し、宮城沖地震が起ることは分かっていたが、想定外の規模で起きた。我々はいま想定外がないようにと考えている。研究者らは調査を分担し合っている。東北の場合、岩手県では百年に一回のもので、宮城県では千年に一回のものだった。対応や復興の仕方は異なってくる。

鎌倉・神奈川の津波対策は、全国でも取り組みが早かった。津波被害規模の想定は数値予測と堆積物の記録からされ、地震・津波の研究者と防災担当者が協力し合って作る。千年に一回の事態には避難の事を考える。室町時代の明応地震の例も考えに入れ避難場所や堅固な4階建て建物をABCランクで考えた。鎌倉の不利な点は、相模湾の津波伝播の行き止まりの所なので波が高くなることであり、宿命的なものと言える。

基調講演 「数々の災いを乗り越えてきた鎌倉」

木下直之東京大学教授（文化資源学）

鎌倉の歴史を振り返り、文化遺産がどのように守られてきたかを考えよう。災いには、天災と人災がある。明治初年の神仏分離で鶴岡八幡宮の仏教系建造物は瞬く間に失われた。

次の人災は戦後の住宅地開発だった。八幡宮裏の御谷開発への反対運動から鎌倉風致保存会が生まれ、古都保存法の制定に至った。それが鎌倉を今の姿に落ち着かせた。

天災の方では、関東大震災で諸社寺が被害を受け、その後鎌倉同人会が呼びかけ、鎌倉国宝館が生まれた。指定文化財等は復旧されても、その他には手が及ばない事情に対応した。反面、仏像や仏画が本来の場所から切り離されて展示物になってしまったというデメリットもある。それに比べると、露座だがずっと同じ場所に在り続ける鎌倉大仏の場所で、今日のこの催しが開かれることには大きな意義がある。文化財である前に信仰の対象だからだ。万一鎌倉が津波に襲われても、大仏が復興の拠り所となるのではないか。

パネルトークに向けて、次の問いかけをしたい。

- ①文化遺産という言葉で鎌倉でどう考えるか。
- ②人命の他に文化財をどう守るか。
- ③災害後の復旧に文化財がどう生かされるか。

以上3つである。

パネルトーク

福澤さんは、自然・人工域図や等高線図、ワークショップの報告などから鎌倉の人文地理的特徴を説明し文化遺産周辺の地域防災力の育成強化の大事さ、社寺と協力し合い鎌倉を作っていく必要などを説いた。

学者でもある佐藤住職は緻密な解説で、この二十数年来の文献・考古・地盤地質・大気等さまざまな調査の様子を紹介。科学的な鎌倉大仏の保全対策や今後必要な措置に関し報告し、また文化財の存在意義や歴史教育の意味を説いた。

柴山教授は、「今日の話で私たちは、京都奈良に比べ海に面する鎌倉には、また難しい文化財保護の問題があると解った。今後研究していきたい。鎌倉市民の防災意識は高い」と語った。

木下教授は、「コミュニティを形成するのに文化的景観は大事。世界遺産登録で一時的に観光客は増えるだろうが、その後文化を大事にする町へと向かうことを期待する」とまとめられた。